第五講　小説その２　物理と心理

　吝嗇家の心理と生活に共鳴したりするのは、私に加わった知恵ではなく、齢四十にして、私もようやく物欲と常識の世界に落ちつつあるのではないかと思ってみる。実際、私などは現在、理想を追いつづけるか、物欲の世界に落ちるかの、重大な、危険な岐路に立つ年齢にあるのだから、私が吝嗇家に共鳴するのも、一種の危険を伴わないことはない。けれども、一方私はこのごろになって、(注)謡曲「鉢の木」の精神など、ぴしぴしと身をもって感ずることができ、寒夜に鉢の梅の木を切って、客を饗応した佐野源左衛門の心がよく判るようになったりしたので、私が吝嗇家に共鳴したりするのも、知恵の歯が一本生えたのではないかと、自惚れるのである。

　数年前、故郷にあったころ、私は鶴おじという人と仲好しになった。鶴おじは、私の父より年上だから、その時六十二三であったろう。村でも一二を争う吝嗇家で通っていた。メリヤスのシャツなど着たことがなく、今でも電灯をつけず、(注)洋灯とカンテラをつかっているということだ。鶴おじの家は、村はずれの谷合いにある一軒家で、電柱を一本だけ自弁すれば、電灯をつけてくれるのだけれど、その一本の電柱さえ自弁しないのだ。一軒家だから、隣近所のつき合いもなく、酒もよそではよく飲むのだけれど、うちで仏事や祝い事をしたことは一度もないらしい。朝飯前に馬草一荷刈ってこない時には、かならず草履か草鞋を二三足造った。夫婦と娘の三人暮らしで、嫁さんが下駄をはいてるところを誰も見たことがないと言われ、娘は白粉もつけなかった。

　A<u>その鶴おじと私とが仲好しになったのだった。</u>

　隣村の秋祭りに行って、親戚で御馳走になってのかえり途だった。夜になって隣村の在所外れまでかえってくると、別の途から(注)蹌踉とかえってくる人がある。私の足音を聞きつけて、

「誰ぜえ?」と叫んだ。それが鶴おじだった。

「儂ぜえ、勇ぜえ」と私は大きな声で答えた。

「ああ、勇さんか、えらい遠々しかったのう」

　近づいてくると、鶴おじはそう久闊を叙した。二人とも酔っ払っていたので、肩を組み、月夜の中を、村まで帰ってきた。親

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

しく口を利いたのは、その時が初めてであった。それ以来、私と鶴おじとは意気投じて、仲のよい飲み友だちになった。祝言や棟上げなどの酒事に招かれて落ち合うたびに、私と鶴おじとはいつも席を並べ、宴が果てた後まで居残って、盃(さかずき)を差しつ差されつ、(注)箸拳(はしけん)を打ったり、草津節や小原節を歌ったりするのだった。鶴おじは青鬚(あおひげ)が濃く、眉(まゆ)が太く、子供の時からの印象では、おっかない人に思われていたのに、いっしょに酒を飲んでみると、大口開けてよく笑い、女子衆(おなごし)をからかったり、無邪気な老人であった。酒場の長いのでは定評があり、その鶴おじとつき合うので、私もまた長っ尻(ながっちり)の定評を取ったものである。

「勇さん、もう東京へ行かんで、田舎へいたや」と、何度も鶴おじは繰りかえした。

「そうじゃのう。田舎でのんきに暮らしてもええが……」と私は煮えきらない笑いを浮かべながら、話を受けるのであった。

「儂(わし)ゃ、ほかに何(な)んにも楽しみはない、仕事するばアの楽しみよえ」とも鶴おじは言った。

「そう、仕事に越した楽しみがあるかえ」

「儂ァ、人から悪口言われることもあるけんど、どう言われても、仕事が儂の病じゃけん、やめれないわえ」

　私は、酒脂でテラテラ光る鶴おじの額を眺めながら、相槌(あいづち)を打った。

「財産というものは、仕事をして、金を使いさやせにゃできるもんよえ」と鶴おじは鼻先で答えた。自信のほどもうかがえる。鶴おじは、(注)五段(ごたん)百姓から、村でも指折りの百姓になったのである。

「えらいもんじゃ、遣(や)り上げたのう」と私が感心すると、

　鶴おじは谷に住んでいるので、谷鶴という通り名で呼ばれている。B私は酔いが廻(まわ)ってくると、青二才のくせに、父よりも年上の老人をつかまえて、「谷鶴！」と呼び捨てにしながら、盃を差したものであった。

　ある日、私は裏山を散歩していて、いつか鶴おじの家の上に出ていた。で、私は古い楊梅(ようばい)の木につかまって、谷を覗(のぞ)いた。鶴おじの家は木の間を透かして真下に見えた。私はその時、魔法の国か妖精(ようせい)の国でも覗くような気持ちがしたものである。私たちが子供の時分、鶴おじの家に、熊蜂(くまばち)が籾俵(もみだわら)ほどの大きな巣をかけ、それが白い(注)漆喰壁(しっくいかべ)に懸かっているのが、青田の向こうに見え、一軒家の鶴おじの家が、不思議の国のように思われたものだが、その気持ちは二十数年を隔ててなお生きているのであった。そして、その一軒家に出入りする鶴おじ夫婦が、不思議の国の住人のような気がしたものだが、その気持ちもまだつづいているのであった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

私の眼下に映った鶴おじの屋敷は、西陽(にしび)をいっぱいに受けていた。人里離れた一軒家に漆喰ずくめの塀をめぐらし、母屋、養(よう)蚕(さん)室、馬小屋、納屋(なや)、便所などが屋敷内に整然として、それぞれ瓦屋根(かわらやね)に漆喰が施され、赤土を固めた庭の上に、濃いカッキリとした影を落としていた。庭には筵(むしろ)いっぱいに籾が乾かされ、白い手拭冠(てぬぐいかぶ)りをした娘が、余念なく籾をまぜ返していた。塀の根には、紅白の鳳仙花(ほうせんか)が咲きこぼれていた。静かな秋の真昼であった。

依然として、不思議の国を覗いているような気持ちは、私の頭から抜けなかった。[C]正しく不思議の国であった。こんなに整然として、こんなにカッキリとした影をもった農家は、村でも類(たぐ)い稀(ま)れであった。しかも人里離れた谷合いの一軒家である。私は、自分の村に、こんな屋敷があるのが信ぜられぬ気持ちだった。楊梅の木からからだを起こしたとたん、私は夢から醒(さ)めたように、現実にかえったものであった。

鶴おじは、不思議の国を築き上げるために、一生の間、骨身を削る吝嗇(けち)をしたとしか思えない。私が、物惜しみをしながら、文学に憂き身を窶(やつ)すのも、帰するところ、どうにかして不思議の国を作り上げたい一心なのだが、私は一生かかって、はたして不思議の国を作り上げることができるかどうか。[D]私はまだまだ吝嗇にならねばならない。

（上林　暁「不思議の国」による）

（注）○謡曲「鉢の木」——貧しい佐野源左衛門が、大切にしていた盆栽の枝を切って薪代わりにし、北条時頼をもてなした話がふくまれている。
○洋灯とカンテラ——洋灯はランプ、カンテラは携帯用の石油灯のこと。
○鎗踉と——足もとのさだかでない様子で。ふらふらと。
○箸拳——相互に箸を出し、その数をあてることで勝負を決める遊び。
○五段百姓——一段（反）は約九九一、七平方メートル。五段程度の田をもつ小規模な農家。
○漆喰壁——塗壁材料である漆喰（消石灰に、ふのり、粘土などをまぜたもの）でできた壁。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問１　傍線部Ａ「その鶴おじと私とが仲好しになったのだった。」とあるが、この一文の表現を説明したものとして最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　「その鶴おじ」と指示語を使って、鶴おじの吝嗇ぶりに改めて注意を向けさせ、そんな人のいやがる吝嗇家と自分はつきあいをもてたのだという自慢の気持ちを、「のだった」という含みのある文末表現で言外にほのめかしている。

②　「その鶴おじ」という指示表現と、「のだった」と説明する言い方で、鶴おじという吝嗇家と「私」が友達となったという事実を動かしようのない事柄として、あきらめの気持ちを込めて、とりあげている。

③　「その鶴おじ」という言い方で、極端な吝嗇家である鶴おじの人物像を強く印象づけ、そんな人と友達になったということを、「のだった」という説明の言い方で述べて、意外だとの気持ちを示している。

④　「その鶴おじ」という指示の言い方で、吝嗇家であるということに注意を向けさせるとともに、事柄の結末を危ぶむ気持ちを込めて、「のだった」という主観的で不確定な事柄を表す文末表現を取っている。

⑤　「その鶴おじ」と、物を取り扱うように指示語を付け、また「仲好しになったのだった」とよそごとのように客観化して言う表現をとることにより、一貫して鶴おじという妙な人物への敬遠の気持ちを表している。

問２　傍線部Ｂ「私は酔いが廻ってくると……盃を差したものであった。」で、作者はどのような様子を表現しようとしたと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　鶴おじの、若い者に対して優しく、寛容である様子。

②　「私」の、非常識なふるまいしかできない、屈折した様子。

③　「私」の、吝嗇に徹する鶴おじを軽蔑（けいべつ）する様子。

④　「私」と鶴おじの、他の人に受け入れられない、すさんだ様子。

⑤　「私」と鶴おじの、気のおけない、うちとけた様子。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問３　傍線部Ｃ「正しく不思議の国であった。」には、「私」のどのような思いが表されているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　カッキリとした濃い影をもった鶴おじの家屋敷を今のあたりにしてみると、それが二十数年も前に見たのと少しも変わらない様子であることに、改めて驚嘆の念と不思議な思いを禁じえないでいる。

②　日ごろから吝嗇で通していた鶴おじが、村から離れた谷合いに、白い漆喰壁に囲まれたのどかな別世界をこっそりと作っていたことに感動はおぼえるものの、人間の生き方としては納得しにくい一面を感じている。

③　白い漆喰壁に囲まれた鶴おじの家屋敷ののどかな、整然とした風景をまのあたりにしていると、ここだけがまるで魔法の国のようにも思え、改めてこれをなしとげた鶴おじの生き方に感嘆している。

④　酒を飲むと大口開けてよく笑い、長っ尻の定評をとっていた老人の鶴おじが、実は自分の家屋敷を魔法の国のような世界に仕立てあげた、子どものような心の持ち主であることに感嘆している。

⑤　村のためにはほとんど協力もせず、家族からも孤立した自分勝手な生き方をしながら、理想としての立派な家屋敷を作り上げることに成功した鶴おじに、人間の不可解な一面を感じている。

問４　傍線部Ｄ「私はまだまだ吝嗇にならねばならない。」とは、どのようなことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　一生の間、骨身を削るような物惜しみをした鶴おじが、村でも指折りの農家となった事実を見るにつけても、文学で身を立てていこうとするためには、家族を犠牲にしてでも、今以上の貧乏に甘んじなければならないということ。

②　鶴おじとの交友を通して、彼の吝嗇家という表の顔の裏に、不思議の国の住人とでも言うべき篤実な農家の主人の顔のあることを知り、表面的な物惜しみにとどまらない物惜しみの本当の意味をよく考える必要を感じるということ。

③　一生の間、徹底して物惜しみをして財をなした鶴おじに比べれば、自分自身はまだまだ物惜しみも足らず、夢・理想といえるような家屋敷をもつためには、文学にかかわる金銭の浪費をもっと慎むべきだということ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　徹底した吝嗇家であった鶴おじが、整然とした一つの理想的な小世界を作り上げていたことを思えば、自分はまだまだ不徹底で、自分の文学を作り上げるために無駄をさらに切り捨てていっそう精進していく必要があるということ。

⑤　鶴おじの徹底した物惜しみの生き方が彼の理想の実現につながったという事実を教訓として、自分も理想の文学を実現するために、無駄な表現を切り捨て、一語一語を今以上に大切に使うよう心掛ける必要があるということ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第五講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●『ふしぎの国のアリス』『鏡の国のアリス』……ルイス＝キャロル（一八三二～一八九八）
↓英国の小説家、オックスフォード大で教鞭をとる数学者　本名チャールズ＝ドジソン

語句

吝嗇＝りんしょく↓ケチ・物惜しみ・守銭奴
メリヤス↓ポルトガル語　伸び縮みする生地、ニットとほぼ同義
久闊＝きゅうかつ
↓長い間会ったり手紙をやり取りしていないこと
意気投じる＝いきとうじる↓考え方や意見が一致すること
祝言＝しゅうげん↓結婚式・結婚の祝いの席
棟上げ＝むねあげ↓家を建てるときの儀式・上棟式
長尻＝ながじり・ながっちり
↓人の家を訪問してなかなか帰らないこと
にえきらない↓はっきりしない
相槌を打つ＝あいづちをうつ↓相手に調子を合わせる・同意する
余念なく＝よねんなく↓脇目もふらず集中すること
憂き身を窶す＝うきみをやつす↓やせるほど熱中／
憂き身↓苦労の多い身／憂き世↓浮世↓この世
篤実＝とくじつ↓人情にあつく、誠実であること
気のおけない↓気遣いのいらない・気取らなくていい
精進＝しょうじん↓努力すること
饗応＝きょうおう↓酒や食事でおもてなしする
仏事＝ぶつじ↓法事・法要・葬式や一周忌、三回忌
など
在所＝ざいしょ↓家のあるところ・集落

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第五講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）彼の話にキョウメイする　①明　②名　③銘　④鳴　⑤命

（イ）ザイショ外れまで来る　①剤　②在　③材　④西　⑤財

（ウ）「やりあげたのう」とカンシンする　①関　②歓　③感　④寒　⑤甘

（エ）イゼンとして変わらない　①以　②依　③已　④居　⑤意

（オ）ヨウサン室を見に行く　①産　②参　③山　④蚕　⑤算

次の語句の意味として最も適当なものを、次の各選択肢から選びなさい。

（カ）自弁する

①　自分で費用を負担する
②　自分の責任で弁償する
③　自分で交渉する
④　自分の労力を提供する
⑤　自分の資金で製作する

（キ）久闊（きゅうかつ）を叙（じょ）す

①　久しく会わなかったことを怒る
②　久しぶりの挨拶を交わす
③　遠くから来たことを感謝する
④　長く疎遠であることを咎める
⑤　昔からの友人であることを懐かしむ

（ク）余念がない

①　のんびりと
②　ぼんやりと
③　無造作に
④　熱心に
⑤　慎重に

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第五講　小説その2　物理と心理

《本文の対比構造》

主役

主人公「私」＝精神レベルの吝嗇（ケチ）＝仕事に精進する＝理想の仕事をやり遂げること＝「不思議の国」・その住人「**鶴おじ**」

主な対比

敵役

一般的な吝嗇＝物理レベルの吝嗇＝村人の理解・物欲の世界・金惜しみ・物惜しみ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

村でも評判の、物理的ケチと見なされている鶴おじとなぜ仲良くなったのか、なぜ物欲ではない精神レベルの吝嗇があるとの発見にいたった「私」が鶴おじと意気投合したのか、知りたいでしょ、続きを読んでね、というメッセージです。したがって、③が正解です。①は、「自慢の気持ち」とあり、本文の「自惚れる」と合致するように見えます。ところが、本文の自惚れは、世間の気づかぬ精神レベルの吝嗇家に共鳴できることを誇っているのです。それに対して、この選択肢は「人のいやがる吝嗇家」との付き合いになってしまってます。つまりいやなヤツとも友達になれる器の大きさ、懐（ふところ）の大きさを誇ってしまいました。記述に反する誤りです。②の「あきらめ」、④の「危ぶむ」、⑤の「敬遠」などすべて鶴おじについて否定的で、記述に反する誤りです。なお⑤の「妙な人物」は、「不思議の国」つまり文脈的には「理想の国」を誤解したものですね。文脈喪失の誤りです。

問２《傍線部説明・選択肢》

「私」と鶴おじは、仕事に打ち込む者同士として意気投合し、飲み友達になっているわけです。したがって、⑤が正解。①は、鶴おじと「私」との関係のはずが、「若い者」と勝手に拡張されています。こういう間違いを不当な一般化といいます。また「若い者」では、村人という今回の敵役も含んでしまいますから、対比混乱の誤りといってもよいでしょう。②と④は、「屈折」「すさんだ」など否定的に書いています。金惜しみのくせに飲んだくれだと。もちろん記述に反する誤りです。とくに「非常識なふるまいしかできない」は、不当な限定です。二人は仕事に燃える男たちなのに。③は、同一性分断の誤りです。二人は同じグループです。

問３《傍線部説明・選択肢》

「正しく不思議の国」とは、理想とする仕事をなしとげたことへの感嘆、称賛の気持ちを表現した比喩です。ほんとにおとぎ話に出てくるみたいなシンデレラ城を物理的に作ったわけではありません。④はそれを物理的にとってしまった誤りです。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

比喩を文字通りに解釈した誤りといってもよいですし、物理的スリカエと呼んでもよいです。さらに今回の文章はそもそもが「物理⟷心理」ですから、対比混乱の誤りとも呼べます。①も「家屋敷」が「二十数年も前に見たの」と変わらないと物理的な面で驚いています。これも比喩を文字通りに解釈した誤り・物理的スリカエ・対比混乱の誤りです。②は、「納得しにくい」との否定表現が記述に反する誤りです。⑤は、たくさんの誤りを含んでいます。まず「村」との「協力」の有無は今回の争点ではありません。正しい対比喪失の誤りです。また鶴おじファミリーはみんな働き者として描かれていますから、「家族からも孤立」「自分勝手」はことごとく記述に反します。さらにいやなヤツなのに「成功」するなんて「不可解」だ、というのは「不思議」というキーワードの勘違いですね。文脈喪失の誤りです。

問４《傍線部説明・選択肢》

①は、「家族を犠牲」が誤りです。日本の伝統的な作家・私小説作家にはそういう人が多いイメージがありますが、文中では誰も犠牲にしていません。記述に反する誤りです。また「貧乏に甘んじ」では、物理レベルのケチのことになってしまいますね。物理的スリカエ・対比混乱の誤りです。②は「篤実」が誤りです。情にあつく誠実、親切という意味ですが、「薄情⟷篤実」という対比ではありませんからね。正しい対比喪失の誤りです。③は、「財・物惜しみ・家屋敷・金銭」など徹底的に物理です。物理的スリカエであり、対比混乱の誤りです。⑤は、「無駄な表現」「一語一語」とあるように原稿用紙上の言葉づかいのレベルの話になっています。鶴おじは農家として理想を追求し、「私」は文学表現者として理想を追求するという話のはずが、小さくなってます。こういう間違いを不当な矮小化といいます。④が正解です。「精進」は目標に向かって努力することですから、精神レベルの吝嗇の言い換えとしてＯＫです。

模範解答

問１＝③　問２＝⑤　問３＝③　問４＝④

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第五講

（ア）④　（イ）②　（ウ）③　（エ）②　（オ）④

（カ）①　（キ）②　（ク）④

解答漢字一覧

（ア）共鳴　（イ）在所　（ウ）感心　（エ）依然　（オ）養蚕

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。